

ASSOCIAÇÃO CENTRAL NIPO-BRASILEIRA

NOTÍCIAS E INFORMAÇÕES



ブラジル特報

No.1624
2015年1月号

大特集

『日伯外交関係樹立120年の歩み』

新次元のブラジルと日本

駐日ブラジル大使 アンドレ・コヘア・ド・ラゴ

あの町この町

フロリアノーポリス



一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail info@nipo-brasil.org

〒105-0003 東京都港区西新橋 1-1-15 物産ビル別館 TEL:03-3504-3866 FAX:03-3597-8008 発行人: 大前孝雄/編集人: 岸和田仁

レジストロ入植百年史 『一粒の米 もし死なずば』(無明舎出版) を熟読する

岸和田仁 (『ブラジル特報』編集人)

ブラジルの邦字紙「ニッケイ新聞」で2013年6月22日から2014年2月18日まで、127回も長期連載された記事「日本移民の原点探る レジストロ地方入植百周年」が、このほど一冊にまとまり、無明舎出版から刊行された。著者は同紙の深沢正雪編集長である。

筆者もこの著作を通読して、叙述内容の量と質に改めて圧倒された。超労作にして力作である。実は既に新聞連載中に斜め読みしていたのだが、やはり本になったものをまとめて読むのでは読後のインパクトが全くといっていいほど違う。レジストロ地域にスポットライトを集中的に当てた日本人移民入植史であるが、日本の近代史とブラジルのそれが相互反発し合ったり、重なり合ったりしてブラジル風カクテルに仕上がってくるプロセスが巧みな筆致によって明らかになってくるのだから、読む方としては本を握りしめて読み進むことになる。“面白い”という語弊があるかもしれないが、出来の悪い推理小説よりもはるかに刺激的で、歴史上のナゾを解き明かしながら連鎖的に叙述が繋がっている歴史物語となっている。文章が読みやすいだけでなく、事前の調査も周到にして緻密であることも指摘しておくべきだろう。なにしろ、巻末に掲載された日本語やポルトガル語の参考文献の数は100冊を超え、インタビューした関係者の数も同等レベルとなっており、新聞記事というよりも、現地取材と文献調査を有機的に融合した、歴史社会学のケーススタディー論文集といっても通用する著作になっているからだ。

さて、ここで、この労作のアウトラインだけでも追いかけておこう。

サンパウロ州レジストロ市。サンパウロ市から南西に180kmのところの位置する中堅都市で、サンパウロ市と隣接州パラナンの州都クリチバ市とのちょうど中間地点だ。国道116号を行けば、今なら車で3時間ほどで着くが、100年前は、サントスに出てから海路でイグアッペ港へ行き、そこからリベイラ河を遡る、と3日もかかる僻地であった。地理的にも海岸山脈と大西洋に挟まれているため、降水量が

多く高温多湿で、「サンパウロのアマゾン地方」と呼ばれたところだ。

そんな地方に、日本移民による植民地が三つ開設される。1913年開設の桂植民地、1914年のレジストロ植民地、1920年のセッテ・パーラス植民地、だ。当時はこの三つを「イグアッペ植民地」と総称していたが、桂植民地は、日本主導による最初の植民地であった。この入植計画を進めた「東京シンジケート」は、「伯刺西爾拓殖株式会社」(かつての南米銀行のルーツであるブラジル拓殖組合とは別)に改組されてブラジル移民にコミットしていく。大浦兼武、桂太郎、三宅雪嶺、杉浦重剛、渋谷栄一、高橋是清といった明治の政治経済界の重鎮が複数関わっているのが、このレジストロ地方への入植移民の特徴だ。植民地の名前に、首相桂太郎を冠したのは、その辺の経緯をよく示している。そんな国策的移住地に求められたことは、食糧不足の日本に米を供給する米作基地をつくらうというものだったが、結局、米作は成功せず、その代替として紅茶、バナナ、イ草などが植えられ、栄枯盛衰を繰り返していく。特にブラジル紅茶として有名になった茶産業は、その最盛期1980年代には、製品で1万トン以上もの生産規模を誇る基幹産業になっていた。

この古参移住地については、移民70周年の際編纂された『ブラジル日本移民70年史』には一言も書かれていない。何故か?と定番資料の移民史の行間を読み進む筆致は、推理小説よりもスリリングである。

ちなみに、タイトルは、新約聖書『ヨハネ伝』の一節「一粒の麦もし地に落ちて死なずば、ただ一つにてあらん、死なば多くの実を結ぶべし」から採られている。桂植民地は、麦でなく米の一粒であったという著者の言葉に、読者は無言で沈吟するしかないだろう。

